

私の目指す授業

動きのこつの見いだし方が分かる授業

跳び箱運動を思い浮かべてください。抱え込み跳びができるようになりたいと考えている子どもが、自らの力で「課題を解決するために必要な体の部位の動かし方（動きのこつ）」を見だし、抱え込み跳びができるようになる。過去の運動場面で習得した学び方を、他の運動場面でも活用できる子どもの姿は、とてもよい姿だとは思いませんか。私は、**動きのこつの見いだし方が分かる子ども**を目指して授業をしています。

「知識を習得し、活用する」とは、体育科においてどんな知識なのでしょう。私は、「**動きのこつの見いだし方**」が、体育科における中核的な知識だと考えます。なぜなら、その知識を習得した子どもは、他の運動場面においてその知識を活用して動きを身に付けることができるからです。

これまでの授業では、モデル提示やアドバイスにより、子どもに動きのポイントを示し、動きを身に付けさせてきました。しかし、このような指導では、動きを身に付けることはできますが、上記のような「自らの力で動きのこつを見いだす子ども」にはなりません。なぜなら、動きのこつの見いだし方に問題があるからです。

その問題点は2つあります。それは、「**①動きを身に付けていない自分の体の動かし方が分からないこと②自らの力で動きのこつを見だしていないこと**」が考えられます。子どもは、動きを身に付けていない自分の体の動かし方を想起できないために、モデル提示やアドバイスをされても、自分と手本との体の動かし方を比較できなかったり、自分の体の動かし方とアドバイスとを関係付けて考えられなかったのです。さらに、子どもは「どうしてその動かし方がよいのか」が分からないままに、正しいとされている体の部位の動かし方を指導されていたため、自分の課題や課題解決に必要な体の動かし方を自らの力で考えることが少なかったのです。

そこで、私は、3つの工夫で問題を改善します。3つの工夫とは、**①「動きのカルテ」②「みんなのカルテ」③タブレット端末**です。

工夫①. 「動きのカルテ」で、「できない自分の体の動かし方」を意識させます！



動きを身に付けさせるための働き掛けとして、動きを身に付けるために必要な体の動かし方を示していました。しかし、自分の体の動かし方を意識していない子どもに、動きを身に付けるために必要な体の動かし方を示しても、子どもは、できない自分の体の動かし方と動きを身に付けるために必要な体の動かし方とをつなげて考えることはできません。できない自分の体の動かし方を自覚させることが必要です。

そのために、私は「**動きのカルテ**」と「**タブレット端末**」を用います。「動きのカルテ」とは、動きを身に付けるために有効な部位や用具を視点として与え、その動かし方を選択させる、簡単に自分の体の動かし方に着目できるワークシートです。動かし方には、「曲げる」「伸ばす」などの両極端な動かし方を示しておきます。また、「**タブレット端末**」で自分の体の動かし方を動画で撮影させます。「動きのカルテ」と「**タブレット端末**」により、子どもに着眼点を定めさせ、できない自分の体の動かし方を意識させます。自分の動きに意識を向けた子どもだからこそ、動きのこつをつかみやすくなるのです。

動きのカルテ(例)

【ひじ】	のばす	まげる	そのた()
【ひじ】	まっすぐ	ななめに	そのた()
	立てる	かたむける	
【こし】	のばす	まげる	そのた()
【あし】	とじる	ひろげる	そのた()

そのほかのこつ

工夫②. 「みんなのカルテ」や「手本の映像」で、様々な情報の中から課題解決に必要な情報を自らの力で見いださせます！



動きを身に付けられない子どもにとっての要因は多様にあるにもかかわらず特定の体の動かし方を示しても、それが必ずしも動きを身に付けられない子どもに役立つとは限りません。また、たとえ役立つ情報だとしても、与えられるのではなく、自らの力で課題を解決するために必要な体の動かし方を見いだす学習でなければ、他の運動場面で活用できる力にはなりません。

そこで、私は、「みんなのカルテ」や「手本の映像」を提示し、できるようになるための体の動かし方を問います。「みんなのカルテ」とは、一人一人の子どもが動きを身に付けるのに有効だと考えた部位や用具の動かし方を一覧にまとめたものです。これにより、子どもに課題解決に必要な情報を自分

で選択させます。子どもは、「みんなのカルテ」「手本の映像」と「動きのカルテ」「自分の映像」とを見比べ、できない自分とできる他者との体の動かし方を比較します。そして、相違点に自分の課題があると気づき、課題を解決できそうな体の動かし方を見付けます。このようにして、子どもは課題解決のための見通しをもちます。

みんなのカルテ (例)

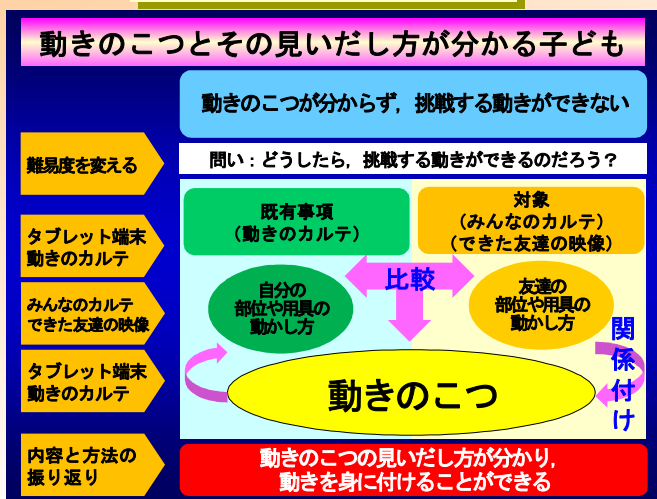
体の場所やボール (どこを、何を)	動かし方 (どのように動かすのか)
目	ボールが目をはばたかせない 前の方を見る
ひざ	まげてからのばす おどる
ボール	高く 近い 遠く 近く

工夫③. 「タブレット端末」で、自分や友達の体の動かし方を可視化し、比較しやすくさせます！



これまで、デジタルビデオカメラやデジタルカメラの動画撮影などで、自分や友達の体の動かし方を可視化してきました。しかし、コマ送りやスロー再生ができなかったり、繰り返し見るのに時間が掛かったりしました。しかし、タブレット端末では、それらの機能が簡単にできます。さらに、タブレット端末の中に「手本の映像」を入れておいて、子どもが好きなときに自由に見ることができたり、映像を簡単に共有したりもできます。特定のアプリを使えば、画像を重ねて再生することもできます。

学びをつなぐための構造図



3つの工夫を取り入れて、左の構造図のように授業を展開します。

まず、「動きのカルテ」と「タブレット端末」で、動きを身に付けていない自分の体の動かし方に着目させます。次に、「対象」である「みんなのカルテ」や「手本の映像」を提示し、情報を収集させます。そして、「タブレット端末」で記録させながら試しの運動を行わせ、課題解決に必要な情報を判断させます。このように、課題解決に必要な情報を収集・判断させる力が学びをつなぐ力です。

最後に、考え方を自覚させます。こうして「動きのこつの見いだし方が分かる子ども」になるのです。